

クローズアップ

本学教員の研究を
詳しく紹介

うたを歌うこと

音楽教育講座 専任講師 ^{みずの}水野 ^{あられ}亜歴

生活の中に溢れる歌

歌は生活する中で一番身近な音楽だと思います。幼い頃お母さんが歌ってくれた〈子守唄〉、子どもの頃近所の公園や学校の休み時間に友達と歌って遊んだ〈あそびうた〉や〈わらべうた〉、中学生の頃は友達の間で流行っていた〈歌謡曲〉を歌いながらトイレ掃除をしたり、恋や失恋のたびにいつも寄り添ってくれた〈ラブソング〉、音楽の授業でみんなで取り組んだ〈合唱〉、高校生の頃は〈カラオケ〉が大流行りでよく友達と歌いに行きました。自分が歌うにしても歌わないにしてもこの世の中は歌で溢れていて、歌はとても身近な音楽手法なのです。

声楽家を志すきっかけ

生まれてから沢山の歌と出会ってきましたが、私の場合、父が声楽家だったためクラシック音楽に触れる機会が普通の人より多かったと思います。家にいても父の練習している歌声が日常的に聴こえてきますし、歌を習いに来た生徒さんの歌も聴こえてきます。子どもの頃はこれがよい子守唄のようで聴きながらウトウトしていました。

幼い頃からオペラの稽古にも連れられて行きましたが、その頃はまだ声楽の道に進むことは考えていませんでした。声楽家を志そうと心に決めたのは何時の事だったか明確には覚えていませんが、おそらく中学生の頃だと思います。父が出演するコンサートに行ったときの事です。演奏が終わり、音楽が空間に消えた静けさのあとの大きな拍手と歓声、そして何よりも演奏を聴き終えた聴衆の笑顔を見て「歌ってなんて素晴らしいんだ!」と感動したのがきっかけで音楽大学を目指すことになります。

下：水野研究室のメンバー「互いに高め合い音楽を楽しむ」



SUMMER 2018 ならやま 10

声楽は自分との戦い

私は大学時代から19世紀のイタリアオペラを中心に演奏法の研究をしてきました。私の声種はテノールですが、イタリアオペラを歌うとなると普段の生活では出すことのない高音域をマイクを使わず実声で歌わなければなりません。さらに歌っている時間も長いので強い精神力と集中力と体力、そして訓練された発声法が必要となります。それらの能力を十分に発揮するには身体を健康に維持することがとても大切になってきます。あまり気にし過ぎてもいけません。風邪を引いてしまえば歌えるものも歌えません。弦が錆びついて今にも切れそうなギターで演奏するようなものです。楽器をメンテナンスしなくてはいけないのと同じように歌い手は自分の楽器となる身体をメンテナンスしなければなりません。メンテナンスができることも含めて声楽家と言えるでしょう。声楽を続けることは一生自分との戦いなのです。

声という楽器と表現

声という楽器は十人十色であって10人いれば10の楽器、100人いれば100の楽器になり、すべて違う一つひとつ個性のある楽器です。また心身の成長とともに変化して行く楽器とも言えます。声とは自分の性格が出るもので自信のある人は強くはっきりした声になりますし、丁寧な人は丁寧に、ガサツな人はガサツな声に、普段物静かでも芯を持った人は声にその説得力が出ます。そんな一人ひとり違う声に出会うことはとても楽しいことですし、その人の楽器作りを一緒にしていくことはとても大変な作業ですが、良い楽器の響きを出した時の感動はそれに勝ります。声楽作品の大半には歌詞があり、曲があります。自分という楽器を用いて、言葉に秘められた想いと、そこに曲をつけた作曲家の想いを楽譜から読み取り表現します。しかし表現するにはその音が出るというレベルの先まで行かないことにはその音を出すのに必死で到底表現にまで及びません。声という楽器作りは作品を表現し伝えるためにもっとも重要な作業と言えます。



上：恐竜の化石の下で子供と大人のためのコンサート
右：入賞者記念コンサート





歌で人を幸せにする

大学時代はイタリアオペラ作品に魅せられ研究し、大学院に入ってからオペラと並行してスペイン歌曲の音楽の演奏法について研究をしてきましたが、私の根本にあるのは歌を始めるきっかけとなった「歌で人を幸せにする」という想いです。研究室の学生には声楽の知識や技術だけでなく、人に伝える想いを歌を通して学び、将来教員になった時に子ども達に歌うことの楽しさを伝えてくれればと願っています。



老人ホームでのコンサート

最近の研究

歌は言語に支配されているという点に興味をもっています。イタリア語で書かれた歌にはイタリア語の響きやニュアンス、アクセントがあるのと同じように日本語には日本語の美しさや抑揚があり、それぞれ曲は書かれた言語によって支配されています。多くの声楽初心者にはイタリア語をローマ字読みしがちですが、日本語に依存したローマ字の発音ではニュアンスもリズム感もイタリア語とは異なってしまう、その作品の表現解釈が作曲者の解釈から遠のいてしまう危険があります。また逆にイタリア語に依存してしまったまま日本語の歌を歌ってしまっても同じことが言えるでしょう。イタリアの演奏はイタリア人の演奏で、ドイツの歌はドイツ人の演奏でというように、その国の言語を話す人の演奏を聴くこと、上手な歌手の演奏をたくさん聴くことをお勧めします。グローバル化が進む現代、海外の歌や歴史を知ることはもちろん、海外の人たちに向けて日本の声楽作品を日本人として誇りをもって歌うためにも言語の特徴から表現方法を研究していきたいと考えています。

プロフィール



音楽教育講座

専任講師 みずの あれき 水野 亜歴

専門は声楽。

東京音楽大学大学院声楽専攻独唱研究領域修士課程修了(2013) 修士(音楽)。
東京音楽大学非常勤助手、奈良教育大学特任講師を経て、2018年より現職。

